円生の死と三遊協会

至芸惜しみつつ、弟子は落協復帰へ

故 円生師匠

「はなし家は高座で死ねれば本望だ」と、日ごろから口にしていた円生が、それを実行してしまった。

円生の父である先代（五代目）円生も、前日まで高座をつとめて、昭和十五年一月二十三日に亡くなっている。芸に衰えを見せないで死ぬ――これが円生二代の、この世で最後の〝気どり〟なのかもしれない。

「おやじ（志ん生）と違って、長わずらいをしないで死んだのは、当人にとっては幸せなんだろうけれど……。私は円生師匠と、亡くなる直前に五日間ばかり一緒に高座をつとめたが、大変いい出来だった。とくに大阪でやった『豊竹屋』はよかった。このはなしはほかにだれもやらないので近く私が円生師匠から教わる約束をしたところだったのに……」と、突然の死を聞いてかけつけた古今亭志ん朝は、声をつまらせて残念がる。

永年のライバルで、円生とは不仲だった林家正蔵も、その死を聞いて涙を流したという。理想的な死に方とはいえ、円生の死は落語界に大きな穴をあけたことはいなめない。

古典落語一筋に生きた――といっても、宇野信夫さんの古典風の新作などは、好んで高座にかけた。そのレパートリーは二百あまり。当代随一の量である。中でも「三十石」「樟脳玉」「庖丁」などの、いきで洒脱（しゃだつ）なはなし、「真景累ヶ淵」「牡丹灯籠」などの長編人情ばなしでは、他の追従を許さなかった。十年前、名古屋で「髪結新三」を二時間四十分演じたときの迫力は、今でも忘れることができない。あと五年は生きていてほしかった。

ところで大黒柱を失った落語三遊協会は今後どうなるのか。一番弟子の円楽は「今は師匠の告別式と、弟子の真打ち披露のことで頭がいっぱい。百か日が過ぎてから、一門の総会を開いて態度を決めます」と、この件に関しては口を閉ざしている。

しかし、落語三遊協会の誕生は、真打ち量産に対する円生の個人的な反対意見に端を発しており、円楽以下の弟子たちは、師匠にそむくわけにはいかないと行動を共にしたにすぎない。

また落語協会側も、柳家小さん会長が、円生の生前から「弟子たちに罪はない。帰ってくれば、いつでも受け入れる」と言っており、寄席側も円生の弟子たちの出演を望んでいる。現に八月下席の上野鈴本には、住吉踊りで円生の弟子の円弥が特別出演している。

したがってすべては円楽たちの考え方にかかっているわけだが、円楽は落語三遊協会に執着はなく、落語界は一つにまとまるのが望ましいと考えていること、その他の円生の弟子にも、寄席に出たがっている者が多いことなどから、円生一門の落語協会復帰は九分通り実現するだろう。

（保田　武宏記者）